

氏名	湯本 優希
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第471号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	近代文章表現における美辞麗句集——表現の再構築と受容
審査委員	(主査) 金子 明雄 (立教大学大学院文学研究科教授) 沖森 卓也 (立教大学大学院文学研究科教授) 高橋 修 (共立女子短期大学文科教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序

第一部 明治期における美辞麗句集の全体像

第一章 明治期における美辞麗句集の実態

第二章 類語集の系譜と消長

第三章 近代大阪の出版界と美辞麗句集——心齋橋筋の書肆矢島誠進堂を中心に

第四章 学校教育における美辞麗句集——漢文教育と作文教育

第二部 美辞麗句表現と美文

第五章 大町桂月を軸とした美辞麗句共有のネットワーク——美文とはなにか

第六章 小島烏水の叙景——雑誌『文庫』の美文をめぐって

第七章 『花紅葉』の構成と受容——美文教科書としての軌範性

第三部 美辞麗句による風景描写

第八章 月ヶ瀬観梅紀行文における美辞麗句——トレース表現と美辞麗句集

第九章 杉田観梅紀行文における美辞麗句——同質化される風景

第十章 美辞麗句によって「幻出」される風景——明治三十年代の『文芸倶楽部』を視座として

跋

美辞麗句集目録

参考文献

(2) 論文の内容要旨

本論文は、明治期を中心に、文章表現において「語」「文(章)」のレベルとは別に、「句」のレベルで規範的な役割を果たした美辞麗句に着目し、それを体系的に採録して作文のためのツールとして利用された美辞麗句集の出版動向に関する調査データなどに基づいて、近代の文章表現の変遷に美辞麗句が果たした役割を明らかにしようとするものである。

第一部を構成する四つの論文は、国立国会図書館が所蔵する「作文」「女子文」に分類される明治期の図書1430点の悉皆調査のデータなどに基づき、明治期における美辞麗句集の実態を明らかにする。美辞麗句に特化した書物(類語集)が「美文」の流行による隆盛期を含みながらも、明治後期に至るまでコンスタントに出版されていたこと、学校教育の展開の中で、漢文的教養との距離の想定できる階層における漢文学習と美辞麗句集が結びついている可能性があったことなどを指摘している。第二部を構成する三つの論文は、大町桂月(美文)や小島烏水(紀行文)といった明治期を代表する文章家の文章観に注目し、従来、和文脈を基軸とすると考えられていた美文において、漢文脈が前景化するジャンル(紀行文)が存在し、美辞麗句との固有の繋がりが意識されていたこと、近代的な紀行文の書き手の意識のなかにも美辞麗句が一定の位置を占めており、必ずしも美辞麗句表現が

一方向的に乗り越えられるべきものではなかったことなどを明らかにしている。第三部は、最初の二つの論文で、美辞麗句集に採録されている美辞麗句の活用の実態を、異なる二つの梅園観梅紀行文において跡づけている。美辞麗句の活用によって、異なる二つの梅園は表現の上で同質化されることになるが、そこでは表現対象レベルでの差異化ではなく、句の選択レベルでの微妙な差異化が実現されており、同時にそのような表現を通して表現者コミュニティにおける一体性が形成されると指摘する。さらに、最後の論文で明治後期の雑誌の紀行文欄の様相を分析することによって、風景を「文(章)」として構築する際の語句選択(美辞麗句使用)の作法の意味作用が、対象を発見し、観察する新しい文章作法の意味作用と拮抗しつつも、長期に亘って重要性を保ち続けたことなどを論じている。

このように、近代的な文章表現の形成過程における美辞麗句の多様なあり方や役割を分析することを通して、本論文は、美辞麗句表現を近代的な文章表現によって乗り越えられた古い表現法と理解するのではなく、両者の相互的な作用を視野に入れた新しい表現史観によって文章表現史を再構築することの必要性を提起している。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文の特徴の第一は、対象となる事柄の客観的な描写(「見たまま」に描く=写実)と表現主体の内面性の前景化(「感じたまま」に描く=個性)を重視する、今日に至る近代的な文章表現観の対極にあると見なされることの多い美辞麗句に着目し、文章表現史において、乗り越えられた定型的で没個性な旧修辞法という見方とは異なる位置を見出そうとする野心的な問題設定にある。

第二に、そのような議論の基礎資料の一つとして、国立国会図書館が所蔵する明治期に出版された作文関連図書の悉皆調査を実施したことである。それらの資料は、「美辞麗句」という用語の今日的な意味内容から容易に類推できるように、文章表現史の観点からは、既に乗り越えられた過去の定型表現のコレクションであると同時に、文章表現の後衛を担ったに過ぎない実用書と位置づけられて、深く顧みられることのなかったものである。

第三に、美辞麗句を中心とする文章表現の問題を、時間的な幅としては、ほぼ明治期全体に亘って、文章ジャンルの幅としては、狭義の「美文」から紀行文全般に亘って考察しようとする研究対象領域の巨視的な広がり認められる。

第四に、そのような実用書を必要とした作文学習者層の実態を考慮し、漢文的素養を自然に身につけることが可能であった青年層(学歴エリート層と近接する)と、学校システムの外部で作文を学ぼうとしたり、内部にあっても漢文的素養と距離のあった青年層との差異に着目し、美辞麗句集の消長を、それを必要とした読者層の動向との関係性において説明しようとした点に特徴が認められる。

(2) 論文の評価

本論文の学術的な価値は、まず、従来の表現史・文体史研究が十分に活用できたとは言えない美辞麗句集について、実証的な調査研究に基づいてその実態と重要性を明らかにしたことにある。論文審査の過程において、調査結果の提示方法について工夫の余地があるという指摘がなされたが、それは逆説的に本論文の基礎となっている調査データの研究上の価値と可能性を示すものと言えよう。そして、主に思想的な著作や芸術的な表現の変遷を軸に展開してきた表現史・文体史研究に対して、美辞麗句集（作文書）が学校教育の内外で作文を志した青年たちに対してどのような表現規範を提供しようとし、青年たちが美辞麗句集（作文集）を実際にどのように活用したのかという観点から、当時の雑誌等に投稿された一般的な作文を歴史的に取り扱う新しいパラダイムを提起したことも本論文の重要な功績である。本論文は、近代の日本語表現が旧時代の表現を乗り越えて一方向的に発展したとする見方に疑義を呈し、場面に適切な美辞麗句を選択するような作文作法が、近代的な表現の形成過程において多数の作文者に利用されていた実態を明らかにし、その意味の解明を推し進めている。問題領域の広大さに比して、本論文によって解明された意味はまだまだ限定されたものに過ぎないと指摘することは可能であるが、今日の研究状況に対して十分に刺激的な問題提起を成し得ていると評価できる。研究としての手続き、論文作成の作法は必要なレベルを満たしており、本論文を学位に相当する優れた研究と認めるものである。